

ナラヒロ 奇跡の展覧会

—2002年弘前市吉野町煉瓦倉庫での奈良美智展について—

須 藤 弘 敏[※]

要旨：

2002年に弘前市吉野町の吉井酒造煉瓦倉庫を会場として開かれた奈良美智の展覧会「I DON'T MIND, IF YOU FORGET ME.」は日本の展覧会史上に残る画期的な事業だった。市民主体で構成された実行委員会、ほぼすべての準備運営をボランティアが行ったこと、公的な助成や施設を用いなかったこと。いずれも大規模な美術展としてはきわめてまれで、なおかつそれが58,742人ももの来場者を集め、赤字を出すことなく終了したことは奇跡的な成果である。その経緯と意義について、直接関わってきた立場から報告する。

An Amazing exhibition Nara Yoshitomo's I DON'T MIND, IF YOU FORGET ME. at the brick house of Hirosaki city

Hirotooshi SUDO

はじめに

東京で開催される運慶やフェルメールの展覧会が数十万人の来場者を数える一方、地方の公立美術館や博物館は入場者の減少に歯止めがかからず、その運営に不安が尽きない。設置者である自治体からの予算措置が削減された結果、展覧会の規模や内容は縮小し、それがますます入場者を減らすという悪循環は、一部の大都市を除けば全国で進行している。秋田県立美術館（2013年9月）や富山県美術館（2017年8月）、大分県立美術館（2017年4月）などの開館は朗報だが、わけのわからない呼称の愛媛県総合科学博物館の改組も含め、実際は既存施設の改廃統合であって、行政によるミュージアム運営の迷走を反映している。所轄を教育委員会から首長部局へ移行させたり、指定管理者やPFI制度を導入したり、ミュージアムに地域観光資源機能の強化を求める行政サイドの思惑もうかがえる。そうした状況は一見ミュージアムの再評価が進んだかのように思えるが、内部ことに学芸員から見れば、ミュージアムの位置づけや学芸員の職務に対する認識が低下していることは最近の政治家の暴言を待つまでもない。

地方における公立ミュージアムの必要性や可能性はもちろん多分にある。にもかかわらず利用の低調が続いている現状は、行政もミュージアム自身も第一の利用者である市民が求めているものに気づいていないためではないだろうか。またミュージアムにおけるボランティアの意義について一時期ほどの関心はなくなってきたように思える。メンバーが固定化しがちなボランティアに期限を設けたり、作業内容をごく限定する傾向も見られる。はたしてミュージアムにとってボランティアはときどき学芸員にはむかう厄介なお客様なのだろうか。

[※] すどうひろとし 弘前大学人文社会科学部 教授／弘前大学大学院地域社会研究科

青森県弘前市は2002年時点で人口約17万5千人の中規模都市で、言うまでもなく首都圏や近畿地方からはるかに離れ、新幹線も通らず、産業も農業に大きく依存し、高齢化の進行度も早い。その弘前市で3回開かれた現代美術の展覧会にあわせて約16万人の来場者があった。大都市の美術館でもまず人が入らない現代美術展を、美術館でも博物館でもない酒造会社の倉庫を会場として、財政基盤も組織もゼロの状態から、ほぼ市民ボランティアのみで運営し切ったことを知れば、その来場者数が驚異的なものだったことは認識してもらえよう。きわめつけは、最終的に黒字で終わったことだ。施設も人も予算も知名度も確保されている公立のミュージアムとは正反対の組織がなしとげた、この世界のアート史上に残るであろう展覧会の始まりと経緯を述べていきたい⁽¹⁾。

1. 2001年7月の出発点

2001年8月から10月にかけて、横浜美術館で現代アート作家奈良美智⁽²⁾の初めての大規模な展覧会「I DON'T MIND, IF YOU FORGET ME.」が開かれ、約9万8千人という国内作家としては同館最大の来場者を集めた⁽³⁾。これをきっかけに奈良の知名度は急速に上がり、作品の画像をいたるところで目にするようになっていく。この展覧会は芦屋市立美術博物館、広島市現代美術館、北海道立旭川美術館へ巡回することが決まっていたのだが、その最後に弘前市吉野町にある吉井酒造株式会社の煉瓦倉庫⁽⁴⁾で開催することを奈良自身が強く希望していた。そのきっかけは、たまたま雑誌で奈良の作品を見た同社の社長吉井千代子が強くひかれ、当時青森県立美術館の設立準備室学芸員だった立木祥一郎にその情報を求めたことにある。立木は奈良を吉井に紹介し、奈良が煉瓦倉庫を訪ねたのが2000年8月だった。その時点で煉瓦倉庫はまったく使われておらず、黒いタールが分厚く塗られた巨大な壁面やタイルのはげた実験室に奈良は感動し、ぜひここで展示をしたいと願い、それまで煉瓦倉庫に対する様々な使途での使用依頼の多くを断ってきた吉井が奈良と立木に快諾したのが始まりだった。

県職員学芸員としてだけでなく、広く地域の様々な芸術活動に関わっていた立木には弘前地域にも多くの知己があり、早速この煉瓦倉庫での展覧会実施への協力を打診し続けたのだが、いずれも理解はしてくれても引き受ける人や組織はなかった。そして巡回展を弘前で実施するか否かのタイムリミットは横浜美術館での開会前、2001年の7月だった。どれだけの予算や人員が必要となるか、収支の見込みはたつのか、何ら保証のない大規模なイベントに、過去にそうしたアートイベントを開いた組織も経験もない弘前の人々が手を上げなかったのは当然である。ところが、たまたま弘前大学人文学部で「博物館経営論」を担当していた筆者須藤は7月3日に立木をゲストスピーカーとして招いて、青森県立美術館の構想などを話してもらったあと、立木からこの交渉の苦境について聞かされたのである。須藤は奈良美智の作品を既に知っていたが、そうした大規模な巡回展が始まろうとしていて、さらに弘前市内の煉瓦倉庫が既に会場として想定されていることなどは初めて知った。そのとき、安請け合いで「ひょっとしたらあてがある」と答えたのだが、立木も社交辞令だと思っていたはずである。

その日の午後、須藤は出身高校の先輩で酒飯店経営者である土岐政彰を訪ねて、この件を打診した。それは、土岐が弘前市商工会議所青年部や地域商店会の役員などを務め、文化的な事業にも理解があったからである。土岐は奈良美智をまったく知らなかったが、事業自体の意義には関心を持ち、彼の伝手に当たってみることを約束してくれた。その数日後、土岐から須藤に連絡があり、弘前市青年会議所の次年度理事長に内定している写真館経営の長谷川正之が同会議所の次年度開催事業として乗り気だということであった。さっそく立木にその件を伝えたが、その後青年会議所メンバー内の検討や弘前市でコミュニティFMなどを運営しているNPO法人CASTなどとも協議が進んでいった⁽⁵⁾。そして正式に第1回の準備委員会として青年会議所次年度役員予定者ら3名と土岐、立木、ほかに地



図1 会場外観

域の映画祭などを当時企画運営していた弁護士の三上雅通、そして須藤らが弘前市内で集まったのが8月23日だった。立木が展覧会の概要や準備のための期間や段取り、初期費用の見込み、煉瓦倉庫オーナーの内諾があることなどを説明した結果、青年会議所メンバーが主体となって市民組織の実行委員会を立ち上げ、すべてをボランティアで運営する方針で参加者の合意が得られた⁽⁶⁾。

その後、9月3日に煉瓦倉庫オーナーの吉井千代子も出席して第2回の準備委員会、10月4日には会場の設計や現場を指揮することになる建築士の前田卓らも加わって倉庫を見学した。上記のメ

ンバーが主に弘前地域居住者に声がけして集めた人々が集まったのが10月10日で、これが第1回実行委員会となった。その後、青森県内最大紙の東奥日報社佐々木高雄社長に長谷川らが働きかけ共催の内諾を得⁽⁷⁾、事前の準備は急ピッチで進んでいった。年の明けた2002年3月までに5度の実行委員会が開かれ、実行委員による出資金拠出や市内の企業店舗などへの協賛金集めが進んだ。しかし、予算措置をとまなう県や市については直接支援を求める時間的な余裕がなく、唯一、芸術文化振興基金へ申請し、240万円の助成が決定したのが4月11日だった⁽⁸⁾。

市内中心部の商店街の空き店舗一角に実行委員会事務局が開設されたのが4月1日で、まもなく市内に展覧会運営ボランティア募集のポスターが貼り出され、「東奥日報」も4月11日の紙面でその告知を行った。実行委員会には総務企画部会、ボランティア部会が設けられ、それぞれの実務に当たったのだが、4月20日に後者の担当で弘前市文化センターにおいて午後と夜の2回ボランティア募集の説明会を開いた。大規模な美術展自体を経験していない弘前市では、美術展のボランティアとは何をどのようにするのかという認識さえ乏しかったにもかかわらず、あわせて284名もの参加者があり、複数の中高年の女性から「私でもできますか」と問われたように強い関心があったことが印象的だった。さらに「協力」という形で支援してくれた弘前大学でもボランティア募集説明会を開き、市民も含む135名の参加者があった。この手応えによって事業の運営実施のめどがたった。また、2002年当時は未だインターネットの利用者は多くなかったが、弘前展実行委員会のHPはWEBにボランティア申込書を書き、それをプリントアウトして県外からの申し込みも受けつけ始めたのだが、そのダウンロード数も上記説明会参加者とほぼ同数だった。事務局への直接持参によるボランティア申込者もかなりの数で、郵送と合わせて5月半ばまでに400名を超えた。

実行委員会は月例だが、その間に実質的な準備作業を行う一部実行委員によるスタッフ会議が何度も開かれ、次々と生じる課題への対応に追われのは、美術館という組織や施設を持たない弘前展の宿命だった。運営の組織は以下のような構成だった。

- ・実行委員会会長 岩井康頼⁽⁹⁾、実行委員長 長谷川正之⁽¹⁰⁾
- ・実行委員 42名（会長顧問等を含む）、監事・顧問 吉井千代子ほか
- ・事務局員 1名⁽¹¹⁾

実行委員の中に立木祥一郎と高橋しげみの2名の青森県立美術館設立準備室学芸員がいて、彼らは県の承諾を得て弘前展の企画業務への協力を行った。ことに立木は巡回展の他会場美術館、奈良美智、その作品マネジメントを行っていた小山登美夫ギャラリーなどとの折衝を専ら行うキュレーターとなり、高橋がその助手を務める形だったが、美術展のプロはこの2名だけでほかの実行委員は様々な業種⁽¹²⁾の経営者、店主、商店街役員、市職員などで、こうしたアートイベントの運営経験がある者はほぼ皆無だった。弘前大学教員では教育学部の北原啓司と人文学部の須藤が参加したが、学識経験者などではなく個人的な参加だったし、会長である岩井も教育学部では油彩画を担当していた

が展示や運営にはあえて口を出さなかった。実行委員は30代から50代の男性が過半で、そのうち奈良美智を知っていたのはごくわずかだった⁽¹³⁾。また実行委員相互に知己はあったものの、青年会議所メンバーを除けば、個々の人脈で集められたもので、実際に毎月の委員会に出席していたのはその半数程度だったと記憶している。母体が青年会議所である実行委員の場合も、あくまで個人の立場で委員会に臨んでおり、年齢や所属先による遠慮もほとんどなかった。また倉庫のオーナーである吉井酒造は会場の使用料として全期間で63,000円しか受け取らなかった⁽¹⁴⁾。実質無償で最大の協力をしたことになる。作家奈良美智自身は弘前会場のみのグッズ製作や無償でのサイン会などのイベント協力を行い、彼自身も展覧会にはボランティア協力するという立場だった。

事業の進捗状況はすべて実行委員会に報告され、その都度課題が協議されたが、美術展というアートイベントの性質や慣例を一つ一つ確認し、納得のいかない限り承認されることはなかった。ことに他の美術館会場ではこうやっているから弘前も、という論理は良くも悪くも通用しなかった。大学で美術史や博物館学関連科目を担当していた須藤は、学芸員経験はないが年間10展以上の内外の展覧会を見続けていたから、立木の提案を支援する立場だったが、立木と実行委員たちの認識の相違をなほと受けとめたこともしばしばだった。一例として招待券の問題がある。博物館や美術館の展覧会では事前に関係機関や関係者に多数の招待券を配布し、規模が大きければ大きいほどその枚数は増えるのが一般的で、このI DON'T MIND展でも横浜など他会場は同様だった。しかし、弘前展では招待券はごくわずかししか配布せず、実際に無料入場者は全体の10%以下で、そのほとんどはボランティア参加者が非番の日や時間に入場した分に過ぎない。商店や事業経営者である実行委員たちだからこそ撒き餌のような招待券の効果は十分理解していたが、あえてこのイベントではそうした方法を拒絶し、市内各所のポスターを掲示したりさまざま協力してくれた店舗や事業所にも招待券を渡さなかった。メディアについても記事や番組報道への協力は惜しまなかったが、広告掲載や放送は一切しなかった。実行委員会で議論した記憶はないのだが、すべてボランティアによる運営なのだから、料金を払って入場すること自体がボランティアなのだという認識が根底にあったように思われる。

また、こうしたストイックなまでの姿勢は、自分たちが美術展運営に関しては地方の素人に過ぎない、であればこそ大都市での美術展に比して貧弱な展示だったり、いい加減な運営になることを避けようとした、実行委員そして後にあげるボランティア参加者たちの強い自負心から発していたとも言える。大正時代の巨大な煉瓦造りの建物とは言え、会場はただの倉庫でしかない。下手をすれば学校文化祭のようなイベントと見られかねないし、だから素人は困ると非難されかねない。さらには財政基盤が全くなく、あくまで入場者数にたよるしかない厳しい条件での開催である。ことさら口にする者はなかったが、依存できる組織や経験を持たない実行委員には一人一人が主催者だという強い意識があったことはまちがいない。また弘前煉瓦倉庫での展覧会は、それ自体が巨大なインスタレーションアートで、空間も運営形態そのものも作品の一部であるため、奈良美智一人ではなく実行委員、そしてボランティア全員が日々作り上げているという共通認識は最初から最後まで持続されていた。

展覧会の基本情報は次の通りである。

- ・会期 2002年8月4日(日)～9月29日(日)
- ・開館時間 10:00～19:00 (入館は18:30まで) 金曜日は10:00～20:00 (入館は19:30まで)
- ・休館日 毎週月曜日 (日曜が祝日の場合、振替休日の翌日)
- ・入場料 一般1000円 大学生・高校生700円 中学生・小学生300円 幼児無料 (小・中学校行事団体観覧は無料〔事前予約が必要〕)
- ・主催 「奈良美智展弘前」実行委員会
- ・共催 社団法人弘前青年会議所・コミュニティネットワーク CAST (NPO)・吉井酒造株式会社・東奥日報社
- ・後援 青森県・弘前市・青森県教育委員会・弘前市教育委員会・青森放送・青森テレビ・エフエムあおり・FMアップルウェーブ

- ・特別協賛 東北電力・弘前高校鏡ヶ丘同窓会
- ・協力 弘前大学
- ・展覧会会場とした使用したのは倉庫2棟の1階部分で、展示面積はほぼ1,600㎡

表1 弘前吉野町煉瓦倉庫での奈良美智展概要

展覧会名称	会期	開館日数	来場者数	平均入場者数	ボランティア参加者数	開催形態
I DON'T MIND IF YOU FORGET ME.	2002年8月4日 から9月29日	51	58,724	1,151	469	巡回展 横浜市、広島市、旭川市、弘前
From The Depth of MY Drawer	2005年4月16日 から5月22日	33	20,019	607	260	巡回展 港区、弘前、福井県あわら市
YOSHITOMO NARA + graf AtoZ	2006年7月29日 から10月22日	83	79,637	959	850	弘前会場単独
	全体	167	158,380	948	1,579	

2. 煉瓦倉庫をアート空間に

弘前展の根本的な魅力でありかつそれが課題だったのが、煉瓦倉庫をどうやって美術展会場に作り上げるかという点である。奈良が2000年8月に初めて見てその空間の魅力に強くひかれ、横浜美術館から始まったとは言え、最初からこの煉瓦倉庫での展示をイメージして作品のセレクションや創作を行ったことは想定できる⁽¹⁵⁾。しかし、実際にそれを展示空間にするためにはいくつもの課題があった。古い倉庫ゆえに人を入れるための空間ではなく、空調はなく、照明のための電力はなく、ましてトイレも水飲み場もない。大半の床は土間で凹凸があり、出入り口には段差やとんでもなく厚い壁面があったりする。来場者の安全や衛生を考え、何をどこまで整備すべきか、消防署や保健所の許認可⁽¹⁶⁾を得る手続き、実際の内部空間や外部の仮設建造物の設計と造作、そしてその費用はどれだけかけられるか、実行委員会が最初にクリアすべき課題だった。幸い建築家の前田卓が、空間をつとめていじるなという奈良と吉井二人の希望をかなえるような工夫をこらし、倉庫1階部分はほぼ当初のままの状態を維持し、ペイントされていた部屋の一部の塗り替え、目立たない配線による照明の設置⁽¹⁷⁾、あえてコンパネと波板のみという仮設のトイレとチケットブースなどの造作を行った⁽¹⁸⁾。工事をともなう部分は建築や電気工事の業者に発注されたが、会場内で用いた黒いベンチや小テーブル、カフェのカウンターなどは前田らの指導でボランティアたち自身による自主製作で塗装まで行った⁽¹⁹⁾ (図2)。

会場内の作品展示計画や動線の設定などは奈良の意向を受け、立木が立案したが、外部の巨大なサインのデザイン (図1) は、この巡回展全体のデザインを担当した東京の古平正義にチケットや印刷物も含めて一任した。6月1日からは会場準備ボランティアたちが毎週土日に会場清掃や塗装などを



図2 準備作業 壁面塗装

開始した。6月4日からポスターが貼り出され、市の中心部、土手町、大町などの商店街がこぞって協力してくれたため、市内いたるところで目になることになった⁽²⁰⁾。7月1日に実行委員会事務局が会場敷地内の木造事務所1階に移転し、平日も会場準備が続けられ、23日によりやう会場設営ボランティアの作業が終了した。その過程では失敗もある。埃がある倉庫内を洗浄した結果、今度は湿気が抜けなくなり実行委員らで高い壁の上までかびの拭き取りに苦勞することになり、展覧会終了日まで毎日閉館



図3 会場内 黒い壁面を活かした展示

時間中は業務用除湿器や扇風機を何台も稼働させるはめになった。7月28日には午前午後の2回に分けて、看視や受付、ショップカフェの運営を担当する会期中ボランティアの実地研修会が行われ、何も展示されていない暗くて広大な会場内を移動しながら、看視の要点などを伝えたが、そのマニュアルは会期中何度も改訂をくり返すことになった。

7月28日に旭川会場の展示が終わり、31日から8月2日にかけて展示作業が行われ、1日に始まった弘前ねぶた祭りの熱気にもあおられ、3日

にオープニングセレモニーとプレビューが行われた。会場入り口前にテントがいくつも張られ、2時45分に奈良が挨拶をして自らガラガラと引き戸を開けてオープンした。役職者や首長の挨拶、白手袋のテープカットと無縁のセレモニーは珍しいし、すぐ近くにあるこれも煉瓦造りの弘前昇天教会の鐘を鳴らしてもらい、さらに開場の3時には煉瓦倉庫西側にある弘南電鉄中央弘前駅の発車ベルも響く⁽²¹⁾という段取りは、実行委員たちのこの会場でしかできないことをやろうという構想による。5時からのレセプションで地酒や郷土料理まで含めたメニューが提供されたのも、こうした経験が豊富な地元の実行委員や協力者ならばこそだった。この吉井酒造煉瓦倉庫の元々の始まりが酒造会社によるシードル製造だったことも踏まえてもいた。3日のこの招待は協賛企業や他館やアート、マスコミ関係者のほかにボランティア登録者を招いたことも本展独自の性格で、あわせて365名の出席者があり、ボランティアや実行委員が手分けして応接に終始した。会場内の展示を一覧し、周辺的环境も見て回った横浜美術館の担当学芸員天野太郎が「弘前に負けました」と須藤に語ったことは忘れられないが、その他のアート関係者の多くもあえて古い倉庫をそのまま使った弘前展の見せ方に感嘆していた。主展示会場へのアプローチとなる倉庫外壁に沿った木造廊下はクモの巣や割れたガラス窓がそのまま、会場内土間床の凹凸もあえて整備しなかった⁽²²⁾。タールを塗った倉庫本館部分の壁面はそのままにして、大きな皿形の作品⁽²³⁾が並んで掛けられた状態は他会場では到底不可能なインスタレーションだった(図3)。

3. ボランティアスタッフによる展覧会運営

ボランティアは会場設営準備の作業、展覧会期間中の看視、受付、ショップ、カフェの仕事を行ったが、個々に希望する作業と日時を聞き、できるだけそれに即して担当してもらったが、複数の作業を兼務することや担当期日の変更や延長などを事務局から依頼することもしばしばだった。さらにボランティア登録は有料だったが、これはボランティアも事業に一口1,000円の出資をするという手順を踏んだためである。会期中のボランティアには早番、遅番、終日のシフトがあり、早番と終日の担当者には昼食の弁当が提供された。弁当以外は弘前会場のスタッフTシャツが1枚もらえるだけで、あとは登録パスで会期中展示を何度も無料で見られることしか特権はない⁽²⁴⁾。プレハブで作った8畳間ほどの休憩スペースで、作業中も2時間程度に1回休憩してもらった。ボランティアの最終登録者は469名で、うち数名は最低延べ3日以上シフトに入る条件を満たさずにやめていったが、過半はむしろ延べ7日以上担当した。

参加者総数は469人で延べでは3,441人となるが、その分布は、弘前市内が62.5%、弘前市以外の県内30.1%で青森県外からが7.5%。また女性が87.8%で男性は12.2%。年齢別では10代30.1%、20代41.6%、30代14.9%、40代7.0%、50代以上6.4%だった。弘前大学生が多かったことが20代の比率を高



図4 作品・来場者・看視スタッフ



図5 スタッフのミーティング

めていたように思われる⁽²⁵⁾。県外からの参加者の場合は奈良美智ファンで、中には会期中全期間を通しての人もいた。しかし、市内の参加者には奈良美智を知らない人が多かったし、美術展覧会そのものの経験がないという人も少なくなかった。16歳から84歳まで幅広い年齢と動機の人たちが集まっていたことが貴重である。最も多くが看視作業の担当となり、会場内10から12箇所原則立って看視に当たった⁽²⁶⁾。8月下旬にはもう重ね着をしないとならなかった暗くて寒い会場に立ちづめの看視は楽な作業ではなかったし、とにかく作品にさわりたいがる来場者たちへの声がけに神経を使った⁽²⁷⁾ (図4)。ショップやカフェ担当の作業はある意味無給の販売スタッフ的な性質で、年齢層も低くアルバイト経験でこなせていた部分がある。しかし、看視作業はミュージアム施設が市立博物館しかない弘前では経験者はきわめて少なかったこともあり、慣れてもらうしかなかった。

毎朝開館前と遅番交代時にミーティング (図5) が行われ、ボランティアスタッフ⁽²⁸⁾ 全員が共有すべき新たな情報や、前日に寄せられた来場者からのクレーム、ボランティア休憩室のノートに書

き込まれたボランティア相互の意見などが紹介され、常に作業内容を改善していくことに務めていた。その中で特に有効だったのがボランティアスタッフ自身が作業や来場者対応で改善すべき点を書き込んだノートだった。そこに書かれた意見については、後述するボランティアリーダーもしくは実行委員ができるだけ回答を書き込み、情報や意見を全員が共有することを心がけていた。会期中このノートは5冊以上になり、その中には「看視ポジション6番の位置はもう少し作品寄りでも良いのでは？」というような運営に関する意見、「やって良かった」「皆さんありがとう」のような感想、さらに「実行委員の〇〇さんの態度はどうかと思う」という率直な批判もあった。それらの書き込みが明日の現場にすぐ反映されることをスタッフ全員が知っていたから、感情的な批判や愚痴ではなく生産的な意見が大半だった。

会場の作業は、受付ブース、入場券のもぎり、会場内の看視、出口での案内、カフェ、ショップに分かれ、受付、看視、カフェ、ショップそれぞれの統括スタッフ、チーフと呼ばれる責任者がいて、彼らには最低賃金の報酬が支払われる有償ボランティアだった。リーダーやチーフはほぼ毎日作業につき、彼らが現場のボランティアを逐次サポートする体制だった。実行委員とボランティアスタッフの中間に位置する性格の彼らリーダーの意義は大きく、以後2回の展覧会の際は最初からこのリーダーが中核となるような運営方法をとることになった。熱心なボランティアが大半だったことが本展成功の要因だが、中には反目したり、若いリーダーの指示に反発する方も見られた。病気も含め、急な欠員が生じた場合は、いつでもヘルプに入るよと言っている会場近くに住む複数のボランティアの方や、土日なら実行委員に事務局員が電話で依頼するのが常だった。もちろん前日に電話⁽²⁹⁾ で翌日のシフト担当確認を事務局員やリーダーから行っていたが、一日20人以上のスタッフが担当する以上、どうしても急な欠員は避けられなかった。

こうしたボランティアスタッフそして実行委員にとって何よりの励みとなったのは来場者の数だっ

た。実行委員会が開会前に試算した時点では、2万人の来場者で収支がほぼ一致すると推定していた。入場料収入が1,400万円、ショップの売上高を2,400万円、出資金協賛金を800万円程度とみた予算案で、グッズの購入費を含んだ経費をその同額と見ていたのである⁽³⁰⁾。そのため、この目標2万人をいつ達成するかスタッフ全員が心待ちにしていたわけである。まず開会から10日目の8月14日に旧盆の帰省客もあって1万人を達成した。その時点で会期はまだ1ヶ月半もあるが、夏休みも終わるし2万人達成は9月半ばだろうと予想していた。しかし、早くも8月24日に2万人を超え、その瞬間会場各所にいたリーダーらのインカムを通して会場のボランティアスタッフ全員に目標達成が知らされ、皆大きくうなずいたことをその場で見てよく覚えている。それら節目の万人単位となった来場者には奈良のサイン入りグッズと花束が渡されることになっていたが、それを幾度もくり返すことになるとは本当に予想していなかった。8月中に学校の夏休みが終わり観光客も減る弘前では、9月に入ると来場者は半減するだろうと実行委員会は予測していたが、3万人目を迎えたのは2週間後の9月7日だった。来場者はここから急速に増え、18日に4万人、そして25日には5万人を超えた。その日朝のミーティングで須藤が挨拶したとき、「ひょっとすると今日5万人目のお客様を迎えるかも知れません」と伝えたとき、ボランティアスタッフ全員がおおーという歓声をあげたこともよく覚えている⁽³¹⁾。

9月の平日は8月ほどの来場者数ではなかったが、土日祝日の来場者が毎回1,000人を超え、ことに15日以降の土日は常に2,000人を超えていた。そして最終日29日は会期中最大の3,077人の来場者があり、最終的に58,724人となった。最後の来場者は若い親子三人で、彼らにも記念品が渡されて午後7時にゲートが閉められた。その晩、市内のホテル最大のホールで展覧会の打ち上げが行われ、葉書での通知を受けて最終日の展示を見がてら再び弘前を訪ねたスタッフを含め、400人のボランティアスタッフと実行委員や関係者で大変な盛り上がりだった。なお、来場者のうち有料入場者は53,456人で90%を超えていて、無料入場者のほとんどは非番のボランティアスタッフだった。

4. 来場者も展覧会ボランティア

来場者については数だけではなく、一般の美術館とはかなり違う反応があったことが重要だと考える。会場の出口にも看視スタッフが一人立っていたのだが、見終わって出て行く来場者から先にスタッフへ「ありがとう」「楽しかった」「来て良かった」と声をかけてくれたのである。中には「みんなボランティアなんだってね、おつかれさま」とか「もう一回見に来ます」との声もあった⁽³²⁾。看視スタッフにとって何よりもうれしい手応えだった。これが単なる一部の感想ではないことは来場者アンケートで確かめられる（文末 表2）。

アンケートは会期後半の9月6日から実施し、3,349件の回答を得た。展示の最後のコーナーに机



図6 アンケート記入の様子

を一つ置き、椅子を二つ用意して記入してもらったようにしたが、すぐにそれでは足りなくなり、椅子を6脚用意しても立って待つ人が出る状況になった（図6）。展覧会のアンケートを書くために来場者が並ぶ光景を日本のミュージアムで見ることがあるだろうか。

その内容は表2の通りだが、弘前市民、市外県外の来場者ともに会場や環境に対してはほぼ同じような評価の分布である。スタッフに対する印象のみ県外の来場者にくらべて弘前市民に肯定的評価がやや少ないのは興味深い。一般に

弘前市民は地元や身内に対しては辛い評価をしがちな傾向がここにもうかがえる。また、この開催を何で知りましたかという質問に対し、市民は最も多くがポスター、その次には共催者で定期的に展覧会状況を報道してくれた地元紙東奥日報、次いでやはり共催者NPO法人CASTが運営するコミュニティFMのアップルウェブ、そして友人知人、学校の教師⁽³³⁾などをあげている。県外からの来場者は仙台市の河北新報などのほか他美術館に貼られたポスター、奈良美智ファンクラブのようなBBSサイト「Happy Hour」が多いが、友人や家族からとか旅行の途中偶然みかけたという回答もかなりあった。住所を記入してくれた回答者のほぼ半数が弘前市民だが、津軽地域の町村部からはまんべんなく多数の来場者があり、情報の拡散がここでも確かめられる。また全国各地からの来場者の多くは奈良美智ファンだったが、観光客がホテルでチラシを見てというケースも少なくなかった。市内の宿泊施設には無償でチラシを置かせてもらっていた。

アンケート回答の半数は用紙にびっしりと詳しく感想を記入しているのだが、スタッフの印象に対する意見を一部あげてみよう⁽³⁴⁾。

- ・スタッフ多すぎ!! けど対応はよかった人もいました。(弘前市、10代)
- ・若いだけでなく、年配の方がスタッフTシャツを着用し働いてたことに感動。(弘前市、20代)
- ・徹底した打ち合わせによるサービス、素人でこれだけでできれば申し分ないと思います。(弘前市、40代)
- ・みなさん笑顔でやさしい対応をして下さり、1人で来たさみしい気持ちもふっとびました。(茨城県、20代)
- ・不慣れながらけんめいな気持ちが伝わった。展示スペースではもっと気配を消してほしい。(岩手県、30代)
- ・スタッフの皆さんにはほんとうに頭が下がります。いろいろ暖かな心使い、しっかり届きました。これから帰ります。胸いっぱい……(札幌市、40代)
- ・いっしょうけんめいに接しているのがヒシヒシ伝わります。いろいろな所に手を抜いていないのは素晴らしいことです。(東京都、30代)
- ・とても丁寧で、フレンドリーな感じでよかったです。(美術館のように冷たくなかった)(山梨県、30代)

好意的な回答のみを抽出したのではなく、実際ボランティアスタッフに感動したという回答が500件以上ある。運営する側の高い意欲が来場者にきちんと伝わっていたことを理解してもらえよう。ある意味で、来場者は自分も煉瓦倉庫内のインスタレーションの一部に化すことができたことを喜ぶとともに、入場料という形で運営の一端をになってスタッフへの共感を募らせたと言えるかも知れない。少なくとも通常のミュージアム体験と異質な鑑賞だったことは確かである。来場者のこうした体験が帰り際のスタッフへの謝辞となったわけである。もちろん県外からの方だけではない。実際に須藤が出口担当をしていたとき、市内の高齢の女性二人連れから「たいしたいがった。こんだ孫連れでくらね(とても良かった、今度は孫を連れてくるね)。｣と告げられたことがあった。アンケートの回答者には少ないが、来場者に市内の高齢者が多かったのも現代美術展としては驚く点である。歴史考古学系の博物館ではないし、彼らには知名度ゼロの作家の展覧会である。チケットブースの担当をしていたときに「ここで何やってらの」と尋ねてきた80代の女性がいた。「美術展です」と答えたら、「おもしろいの(おもしろいの?)｣と再度聞かれたので、



図7 ショップ



図8 会場内最後のコーナー 作品に乗れる！

いくぶん自信はないが「おもしろいですよ」と答えて1,000円いただいた。1時間半も過ぎたころ、その方が帰り際またチケットブースに立ち寄って語った次のことが印象的だ。

「本当におもしろかったよ。何よりこの倉庫にこどもの頃から一度入って見たかったのさ。倉庫にびったりあったものばかり見せてもらって、とても満足した。もう一回友だちを連れてくる（という内容を津軽弁で語られた）。」

本展が現代美術展とおおよそ無縁に思える年齢層の来場者を多く集め得たのは、戦前から市内

中心部のすぐそばにあり高い黒板塀を巡らした大きな煉瓦倉庫の魅力だったのである⁽³⁵⁾。何のイベントでもかまわない、とにかく煉瓦倉庫に入ってみたかったという願望に対し、期待を超える未知のアート体験が与えられたわけである。さらにこうした来場者はほぼ必ずショップに立ち寄り、知人や孫への土産としてグッズを購入していった。ショップ入店者の正確な数は記録がないが、一日のレシートの数からすれば来場者のほぼ6割がショップで何らかの購入をしている⁽³⁶⁾。そしてその平均購買額が3000円を超えていたことも特筆できよう。来場の理由は会場にあり、ほぼ手を加えていない倉庫のありさまとそこに展開した奈良美智のインスタレーションが彼らを満足させたのである(図8)。展示された作品とその構成自体は他の4会場とほぼ変わらない。しかし、来場者の年齢層が拡大し、何よりもスタッフに礼を述べてうれしそうに帰って行く光景は弘前会場でしか見られなかったことは重要だ⁽³⁷⁾。もちろん展示されていた奈良作品のコンセプトがこども時代の思い出にあり、アートと普段無縁な人にもわかりやすく親しみのある表現や質感の作品が共感を呼んだことはまちがいない。しかし、その魅力で来場者レコードを叩き出した他館はいずれも人口30万を超える地域に立地した、美術展のために存在する公立美術館で、運営も実績のある組織と人によって行われていた。それに対して人口約17万人で近くに大都市もない本州北端弘前市の古い倉庫を会場にして、横浜美術館に次ぐ5万8千人以上を集めた理由は、他会場にはない空間と人の力以外の何物でもないだろう。

弘前展を見た、当時アサヒビル芸術文化財団理事長だった加藤種男⁽³⁸⁾は2002年11月にNHKのテレビ番組「BSディベート アートなくして景気回復なし」において、弘前展の入場者数をあげ、「人口17万の街の出来事としては、驚異的な数字だろう。テーマが現代美術家の個展であることを考えると、奇跡的とも言える。会場となった吉井酒造の煉瓦倉庫で遭遇した人々の熱気は、実に感動的であった。……なにが違っていったのか。それは、市民の力の結集があったかなかったかの違いだ。市民の力の勝利だった。」⁽³⁹⁾と語った。加藤が実感した「人々の熱気」とは主催者側だけではなく来場者も含めたものである。実際9月の土日にはショップに入るため屋外に常時20人以上並んでいた。展覧会の満足感がグッズの購入を促した最大の要因で、他会場の数倍の売り上げを記録した。全国各地の奈良美智ファンの間で、横浜や旭川で既に見た展覧会が弘前ではまったく別物らしいという評判が生まれ、夜行バスや車で駆けつけてくる人が日増しに増えてきたのは事実である。しかし、増加した来場者の過半は弘前とその周辺部の人々だったことは駐車スペースの登録ナンバーで確かめている。前述のように、アンケートに回答した弘前市民は町でよく見かけるポスターと地元紙が告げる「ナラヒロ〇万人突破」の報道に促されて来場している。それは地域での情報の拡大にほかならない。会期が地方での展覧会では異例の2ヶ月だったことが功を奏し、次第に情報が市内全体に浸透していったのである。実際、実行委員会は9月は来場者が減るだろうと予測していても特別な対策は何もしていない。レクチャーや映画上映会などはコアなアートや奈良ファンにはアピールするが、夕方軽トラックでかけつけてきて「まだ見られる？」と聞く農作業を終えた人には、町中に広がった「煉瓦倉庫がえらいことになっている」の口コミの噂が何より効いていたのである。

5. 展覧会成功の理由

師団司令部があった軍都弘前には煉瓦倉庫が何カ所もあり、文化財指定された洋館も何棟もある中で、会場となった吉井酒造煉瓦倉庫は市民にとっては別格の存在である。市のメインストリートから横丁へ入ってわずか数百メートル、やはり煉瓦造りで明治時代建築の教会脇を通り、木々がそびえる藩政時代からの神社の傍らに大きな壁面を見せて建つ煉瓦倉庫は、正面にまわると土淵川沿いに電車が走り、その向こうには20世紀中は割烹が居並んでいた。さらに南側には17世紀に建てられた最勝院五重塔の先端が見える⁽⁴⁰⁾。ちょうど京阪電車が地上を走っていた頃の京都の鴨川東岸三条辺りのような、江戸、明治、大正、昭和の記憶が重なるシチュエーションである。それがため、年配の市民ほどこの倉庫と立地に対する思い入れがあり、オーナーの強い意志であえて整備せずにきた建物はその内部も彼らに大きな満足感を与え、市外からの来場者には周辺環境の卓抜さも強い印象を与えたのである。

展覧会本体が58,724人、その他ワークショップやレクチャー等の参加を合わせると延べ60,461人の来場者を集めたことは、加藤が語ったように奇跡的なことで、実行委員は出資金が返戻されるとは誰も思っていなかった。最終的に支出の8千万円を大幅に上回る収入となったのはグッズ売り上げの果たした役割が大きい⁽⁴¹⁾。公的助成や恒常経費の公費負担が実質ゼロの展覧会が赤字にならなかったのは、もちろん人件費が限りなく少額ですんだためだが、何よりも5万人を超える来場者のおかげである。彼らは入場料にせよグッズ購入にせよ、ボランティアのみで運営する展覧会に大いに共感し、寄付金のつもりで支払ってはいない。楽しませてくれる対価として支払い、楽しんだことを記憶にとどめるためグッズを多数購入していったのである。ミュージアム関係者の定番の挨拶に「良い展覧会でしたが、入場者が少なくて残念ですね」というものがある。しかし、この2002年弘前展を経験した後、それはまちがいだと思う。もちろん10万人を超えるような展覧会はむしろ混雑しすぎて悪い展覧会に化すおそれがあるが、どの町のどんな規模の館でも来場者が満足する展覧会ならば、一日平均300人を集めることは可能だと認識している。

ボランティアのみで運営することへの共感と言っても、展示そのものがつまらなければ友人ですら来てはくれない。歴史のある知名度の高い町だからと言っても、その歴史や文化を展示する企画ではない。既に横浜や広島などの大都市で成功した展覧会だからと言っても、弘前市民はほぼだれもそのことを知らなかった。煉瓦倉庫の雰囲気が魅力的だからと言っても、そこでイベントを開くのは至難のことだった。展覧会の成功は、それらすべての条件がそろい、さらにその事業をなしとげようとした多くの人たちが集まったからである。津軽弘前の町に眠っていた倉庫のオーナーと旺盛な制作意欲に満ちていた作家が夢見た展覧会は400人以上の協力者によって実現し、その空間に感動した来場者が次の来場者を招き、5万8千人をも呼び入れたのである。また、長谷川実行委員長や建築家の前田をはじめ実行委員の多くにセンスと実行力に富んだ人たちがたまたま集まり、かれらは弘前とその近郊のメンバーだけで大都会のプロが手がける展覧会に負けないものを実現する意欲にあふれていた。自分たち自身こそ最良の鑑賞者だという自負を持ったボランティアが作家と鑑賞者どちらにも納得してもらえる展覧会体験を提供することができたのである。青年会議所が関わっていたから市内の商店街らとの協働もスムーズに進んだなど要因はほかにも多々あるし、一方で欠点や自己満足に終わった点も少なくない。正直この2002年展については綱渡りの運営だったが、それを活かして以後2回の展覧会開催を実現することができたのだと考える。

とにもかくにも、この展覧会は準備から実施運営まで現場はほぼ素人のみで動かした、市民が市民のために作り上げた奇跡的な事業だったと、関係者ではあるが今も心から感嘆している。秋田県から来た30代女性の来場者がアンケートでそのことを的確に批評している。

「街中のポスターやスタッフの対応で感じたのですが、弘前市全体、そしてスタッフのみなさんのこの展覧会を成功させよう、という熱意がとても伝わってきました。」

6. その後の展開

その後の主な展開を時系列順にあげると次のようになる。

- 2002年10月5日6日 アンサー展「WE WON'T FORGET YOU」
会期中に実施された子どものためのワークショップ成果展。
- 2003年6月 実行委員会の主立ったメンバーを中心にしてNPO法人harappaを設立⁽⁴²⁾。以後の展覧会はこれを軸にした各回ごとの実行委員会が主催することになる。
- 2003年9月11日 市民フォーラム「「奈良美智展 弘前」って何だったの？—残したものはぐくんだもの—」 harappa、ひろさき環境パートナーシップ21、ARTISAN との共催。

2002年展が市民にとってどういう体験だったのかを検証するフォーラム。ボランティア、来場者、小山登美夫らだけでなく第4回ファッション甲子園で2位になった弘前実業高校のチームによる奈良作品にインスパイアされた衣装「Nara World in my skirt」の披露もあった。

- 2005年4月16日から5月22日 奈良美智の二度目の個展「From The Depth of My Drawer」

港区の原美術館、福井県金津芸術の森との巡回展。会場、会期ともに規模は小さかったが、展覧会としての魅力は十分で約2万人の来場者数は妥当なものだった。しかし様々なことが前回とは同じようにいかず、支出の増加にも苦勞した。これ以後は青年会議所や東奥日報社との共催ではなく、実行委員会とharappaの主催となり、人的構成も自ずから絞られてきたが、逆にこの段階から加わってきた実行委員もある。また2002年展の成果のおかげで、市内での認知度が高くなり、市や各種団体からの協力も得やすくなった。一方で、夏休みでもない時期ゆえにボランティア参加者確保が容易ではなかった。ただ、翌年開催する大規模展の前段階という認識で臨んでいたのも、2002年展の際のような、何が何でも成功させるぞ的な取り組みではなく、いくらか肩の力を抜いていた感がある。

- 2006年7月29日から10月22日 「YOSHITOMO NARA + graf AtoZ」

2002年時点から奈良によってこの倉庫全体をイメージして構想された展覧会。大阪の家具や空間デザインの工房grafと共同で、煉瓦倉庫内にAからZまでの小屋を建て並べ、川内倫子、三沢厚彦、ヤノベケンジらゲスト作家のインスタレーションも含めた展示を行った。大規模な造作と建築構造上不安があった倉庫2階部分まで使用する大がかりな展示のため、長い準備制作期間や3ヶ月に及ぶ会期、800人を超えるボランティアなどすべて前例を超えるスケールだった。来場者も県外からの比率が高まり⁽⁴³⁾、海外からの来場者も多数あった。中央のアート情報誌やテレビ番組も特集を組むなどメディアからも注目されたこともあって、幸い約8万人の来場者を得たため、収支はどうか黒字に終わった。このとき、実は1,000万円余の収益を残して事業は終了する見込みになったが、任意団体による収益事業として課税されるおそれが生じたため、残予算で奈良に「AtoZ Memorial Dog」を制作してもらい、2003年以降市有地となっている倉庫目の前の吉野町緑地公園に設置し、市に寄付するに至った。



図9 AtoZ Memorial Dog お披露目

- 2007年10月21日に相馬弘前市長と300人を超える参加者とともにMemorial Dogの誕生お披露目が行われた（図9）。学区である大成小
学校生徒の演奏、倉庫内での長大ロールケーキ入刀など市民多数に祝福されたDogと煉瓦倉庫は、その後弘前の観光スポットとしてガイドブックやポスターを飾り続けてきた。

2007年のAtoZ展については詳しく報告すべき点多々ある。そして同展実行委員会は最後に展覧会事業の公式報告書も作成したが、種々の事情でその出版は見送られている。日々現場

にあつてボランティアスタッフの統括を行ってきたリーダーたちの座談会など貴重な情報が含まれているだけに公表されていないことは惜まれる。またAtoZ展については今もメディアやネット上で言及されることが度々あり、弘前市民も「AtoZ展をやった煉瓦倉庫」として思い出すことが多いようである。しかし、ボランティア本位の運営方法や実行委員会中核メンバーは3回とも変わらず、すべて2002年展の挑戦と成功に基づいている。そのため本稿は、遠くに霞みつつある2002年展の経緯を活字化した次第である。

その後、吉井酒造株式会社から敷地すべてと煉瓦倉庫を取得した弘前市は、中心市街地活性化事業の一環として、すぐ傍らの弘南電鉄中央弘前駅を含めた周辺地区の再開発に乗り出した。その過程でDogは、一旦倉庫内に入れられガラス窓越しにしか眺められなくなり、2018年夏には倉庫の大規模改修工事にともない搬出されてしまった。そして2017年、煉瓦倉庫を「芸術文化施設」として活用すべく、弘前市は「吉野町緑地周辺整備等PFI事業」として約42億円で弘前芸術創造株式会社と契約を結んだ。同社は十和田市現代美術館を運営するエヌ・アンド・エー社や大林組、NTTファシリティーズなど東京の企業の出資である。事業の総合アドバイザーを南條史生、建築デザインを田根剛がつとめるという現代アート最先端の様相を呈し、2020年春のオープンを予定している⁽⁴⁴⁾。しかし、その事業には奈良美智展弘前歴代の旧実行委員は無関係である。一方、アートNPO法人harappaは市内の百石町展示館を市の指定管理者として運営しながら、今も着実にアート関係の事業を継続しているが、その運営には苦勞が多く、大規模な展覧会の開催は望むべくもない。2002年、2007年どちらの奈良美智展でもアンケートには、煉瓦倉庫をアートの拠点にとの要望が多数書かれていた⁽⁴⁵⁾。そして今、市がそれを実現させようとしているのだが、2018年12月の時点では市民や地域と関わり深い施設や運営となるのかどうかはまったくわからない。

付記

本報告は、当時の実行委員会で配布された資料や会期中のボランティアノート、アンケート、HPコンテンツ、BBSおよび須藤手元の記録を用いた。それらの一部は現在もNPO法人harappaのホームページ⁽⁴⁶⁾で閲覧できる。また最後の実行委員会も既に解散しており、情報の公表について承諾を得ることが不可能なため、来場者や参加者以外の数値データについては概数でしか記述していない。また作品そのものの画像は弘前会場の公式写真集『奈良美智展覧会記録写真集 [NARA YOSHITOMO HIROSAKI]』NPO法人harappa発行、ラムフロム発売、2004年、などを参照されたい。

文中ではすべて敬称を省略させていただいた。本稿作成のためNPO法人harappa理事長三上雅通氏、同スタッフ小杉在良氏、青森県立美術館学芸主査高橋しげみ氏には種々有益なご意見をいただき、お礼申しあげる。ただし記述に関する一切の責任は須藤にある。

注

- (1) 本報告は2001年のスタートから3回の展覧会すべての実行委員をつとめた須藤が述べていくが、その立場上すべてが客観的な分析ではあり得ず、もちろん実行委員会を代表してもいない。また終了後16年も経ってから、かつごく短期間で書いたため記述に誤認もあり得よう。ことに関係者の方々からのご批判はよるこんで受けたい。
- (2) 1959年弘前市生まれ、武蔵野美術大学、愛知県立芸術大学同大学院を経て94年までドイツに留学、滞在。95年以降日本で個展やグループ展を重ね、出版やグッズの普及もあつて高い知名度を持つ。現在、村上隆と並んで世界で最も知られた日本の美術作家。
- (3) このレコードは同館で2012年に開かれた奈良自身二度目の大規模展「君や 僕に ちょっと似ている」が10万人を超えて書き換えられた。
- (4) 明治40年から大正12年にかけて当時の福島酒造会社の倉庫と工場として建築された。
- (5) 7月27日にはもう開催を見込んだBBS、YNARAHIROSAKIが立ち上がってもいた。
- (6) とにかくまず巡回展分担金の500万円を用意すれば何とかかなるという、きわめて大ざっぱな立木の説明によく全員が承知したものだとも今も不思議でならない。
- (7) しかし、この共催は金銭的協力ではなく紙面での報道を密にしてもらう形だった。
- (8) この貴重な助成金は実際には事業収支が黒字だったため交付されずに終わった。

- (9) 弘前大学教育学部教授・奈良美智の愛知県立芸術大学時代の先輩。
- (10) 2002年度弘前市青年会議所理事長。
- (11) 発足当初。開会後は追加雇用。ただし最低賃金での時給制採用という有償ボランティア。
- (12) 写真館、生花店、不動産業、米穀店、酒販店、飲食業等々。
- (13) 奈良が弘前市出身であるため、開催に双方の協力が得られたとよく誤解されるが、地元出身作家であることが知れ渡ったのは展覧会開始以後だった。
- (14) 同社社長の吉井千代子は倉庫を米穀倉庫などに貸し出した以後は、まれに市内のイベントに提供したことはあったが、幾度かの申し込みはあっても2000年時点では全く貸し出していなかった。
- (15) 奈良自身がそう語っていた記憶があるが、雑誌記事等を含め未だ確認できていないので未確定である。
- (16) 会場内にカフェを設けたため保健所の認可が必要となった。
- (17) 電源は会期中臨時に引かれた。
- (18) 敷地内から道路の下水道本管につながり必要からトイレの位置決めも大問題だったし、この時点では1回きりの展覧会使用を前提としていたから終了後の撤去を踏まえた設計が必要だった。またトイレは白ペンキ塗りのためきわめて汚れやすく清掃には苦勞させられたが、来場者には煉瓦倉庫と対照的なイメージで好評だった。
- (19) 実行委員には建築家前田の他に材木販売、塗装広告業者もいて彼らが指導した。
- (20) ポスターは横浜会場以下、横につながる一連のデザインで古平の制作。ただし、ボランティア募集のポスターは弘前のみのもので実行委員の水戸が担当。
- (21) 実際の定時の運行スケジュールで鳴らされたもの。
- (22) 来場者には入り口で「お足元にご注意下さい」と毎回伝えていて、幸い転倒事故は一度もなかった。
- (23) 直径2メートルほどの樹脂製の皿にコットンを貼りアクリルで描かれた絵画。
- (24) 実行委員も全く同様でシフトに入っていれば弁当ももらえるけれど、食べるのは休憩室よりずっと狭い事務局の隅の机だった。
- (25) 本データの抽出には小杉在良に協力いただいた。
- (26) 高齢の方お一人のみ座ったままで看視のできるポジションで椅子に座ってもらった。
- (27) 作品がすべて露出展示で床のテーブル以外には結界もないという展示状況では注意するタイミングや話し方が美術館以上にむづかしく、会期中前半は「すぐ怒られる」という評判が来場者にあったのは事実で、その責任は看視ボランティアの指導担当をしていた須藤にある。また、地元のボランティアたちにすれば、全国からの来場者に対し意識してなまりのない話し方をしたのだが、来場者アンケートには度々「やさしい津軽なまりがすてきでした」と書かれていた。
- (28) 実行委員もボランティア参加者も「スタッフ」という呼称で統一されていた。
- (29) まだ携帯メールが一般的でなかった。
- (30) カフェについてはスタッフ以外は運営上の問題で飲食店経営の実行委員に業務委託した。
- (31) 会期中の最少入場者数でも405人だった。
- (32) これは入り口に立つスタッフがチケットのもぎりをする際に必ず「こんにちは」とか「おはようございます」と挨拶をしていたことも影響していよう。
- (33) 2002年9月22日にNHKテレビ番組「ようこそ先輩」が奈良による母校弘前市立文京小学校の授業を放映した。同番組は8月中に煉瓦倉庫会場でも撮影している。同校は全校生徒とその保護者に展覧会を見るよう勧めてくれたし、津軽地域の美術教師研究会でも会長岩井が来場を依頼している。ちなみに会期中小学校以下の団体見学は無料としていたため、保育園や幼稚園の園児が度々来場した。現代美術がわかるの、といふかるところだが、彼らはすなおに作者の意図を理解していた。一例として〈Fountain of Sorrow〉という、円盤の上に5匹の犬が中央の穴を取り囲んでいる立体作品があるのだが、穴にある水は犬たちの流した涙がたまったものであることを彼らはすぐに見抜いたが、大人の来場者からは「よだれを流してるの？」とよく聞かれたものである。もちろん園児たちは作品のタイトルなど見ていないし読めない。
- (34) アンケート回答は展覧会終了後、これも弘前大学の学生ボランティアによって全件データ化されている。
- (35) 道路側二面を囲っていた高い黒板塀は1991年9月の19号台風の際に損壊して撤去された。
- (36) 弘前独自の手ぬぐいは1万枚以上売れた。
- (37) 須藤は芦屋会場のみ見ているが、他会場の担当学芸員たちや弘前でレクチャーに来た美術評論家の松井みどりから聞いた。
- (38) その後、企業メセナ協議会専務理事。
- (39) 同番組のHP、2002年12月。
- (40) 道路をはさんだ南正面は弘前中央病院で、その駐車場に来場者が車を止めないよう注意するのが外回り担当スタッフの苦勞だった。
- (41) その収益は後の2005年、2006年展開催の原資となり、ことに2006年の弘前単独開催でかつ多額の造作費用を要した「YOSHITOMO NARA + graf AtoZ」展で使い果たしてしまった。
- (42) 法人格の取得は2003年12月。
- (43) ちょうど開館したばかりの青森県立美術館と周回する観客が多く、土日はシャトルバスも運行された。
- (44) 当初の構想を推進した葛西憲之市長から、市の事業全般を見直すことを公約とした櫻田宏市長に変わったためではないだろうが、20年春のオープンは遅れる見込みのようである。
- (45) 2002年アンケートのデータを良かれと市に提供したのは残念ながら須藤である。
- (46) <http://harappa-h.org/contents/archive.php>

表2 2002年奈良美智展弘前 会場アンケートから

展示・照明		会場・環境		スタッフ・カフェ・ショップ		どちらから？		性別		年齢		展覧会の経験は？		情報はどちらで？	
良かった	2,946	良かった	2,474	良かった	2,138	市内	1,347	女性	2,489	10歳未満	130	現代美術展は初めて	803	ポスター	1,192
悪かった	167	悪かった	385	悪かった	412	県内	1,314	男性	790	10代	598	美術展は初めて	680	東奥日報	851
						県外	565			20代	996	展覧会は初めて	55	TV（ニュース含）	446
評価度	94.1%	評価度	86.5%	評価度	83.8%	海外	6			30代	728	現代美術展経験あり	579	チラシ	430
										40代	405		友人	339	
										50代	210		ボランティア参加者	207	
										60代	101		雑誌	113	
										70代	42		FMアップルウェーブ	92	
										80代	11		Happy Hour	87	
										90代	2		学校	76	
													Web	53	
													陸奥新報	42	
													家族	35	
													RAB 青森放送	34	
													NHK	25	
													美術手帖	17	
													朝日新聞	12	
													青森市民図書館	8	
													弘前市立図書館	7	
													河北新報	7	
													奈良家	7	
													文京小学校	6	
													ABA 青森朝日放送	6	
													Viva弘前	6	
													たまたま通りがかり	5	
													ATV 青森テレビ	4	
													横浜美術館	4	

年齢分布

年齢	割合
10歳未満	4.0%
20代	30.9%
30代	22.6%
40代	12.6%
50代	6.5%
60代	3.1%
70代	1.3%
80代	0.3%
90代	0.1%

どちらから？

地域	割合
県内	40.7%
市内	41.7%
県外	17.5%
海外	0.2%

全期間中入場者数	58,724
アンケート用紙配布期間中入場者数	30,311
アンケート用紙配布数	10,000
アンケート回収数	3,349